明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

家庭雜誌

第三巻
第十二號

明治三十八年十二月二日發行

由分社
東京市麹町區元園町壹丁目

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

徳不

東京日本橋區南茅場町

有隣生命保險株式會社

電話浪花 特一一四番 二一八〇番

孤必


御用諸學校
體操器械
S.A
TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
..No.5.
Urajimbo-cho
KANDA.
TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
S.A
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
改良ロンテニス 二重枠ラケット一組
一號品 一二、五〇〇
二號品 一一、〇〇〇
三號品 八、八〇〇
四號品 七、四〇〇
五號品 六、七〇〇
六號品 五、七〇〇
七號小學用 四、七〇〇
八號婦人用 六、〇〇〇
九號婦人用 七、〇〇〇
體育用品
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
ピンポン室内テニス
一號 一箱 一、二二〇
二號 同 一、五〇〇
三號 同 一、六八〇
四號 同 一、八三〇
號外 同 〇、八八〇
改良テニスネット
一號 一張 四間半 一、七五〇
二號 一張 五間半 二、二五〇
三號 一張 六間 二、四五〇
四號 一張 七間 二、九五〇
ゴム入フートボール
二號 一個 四、〇〇〇
三號 同 四、五〇〇
四號 同 五、〇〇〇
五號 同 五、五〇〇
六號 同 六、〇〇〇
七號 同 六、五〇〇
八號 同 七、〇〇〇
體操遊戲器械一切
東京神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

ローヤル水ハ

最モ高等ナル最モ進歩セル最モ名譽アル化粧水ナリ

定價 拾錢 拾五錢 廿五錢

ローヤル白粉ハ

最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ

定價 拾錢 拾五錢 五拾錢

發賣元 つやぶきん

東京銀座壹丁目 佐々木商店

家庭雜誌
第二卷　第十二號

大人病

深尾韶

ペストの様に、近頃外國から輸入されたと云ふ譯でもないが、數年來、否數十年來、『大人病』といふ誠に厭な流行病が、大分、日本に多くなつて來た。此の病氣に罹ると、赤痢やコレラの様に吐いたり下したり、又早速死んで了ふと云ふ様な、激烈な事は無いが、其代り、一度少しでも此の病毒に感染したが最後、黴菌はドシ／＼自己の身體の中で殖えて、やがて第一に腰が抜け、ムヤミに怒つたり笑つたりする様になり、その次には次第に心が腐つて、終には其の大事な肉體までも棺桶の中に叩き込んで了はねばならぬことに立ち至るものである。此の怖るべき惡疫が、日本人五千萬中に、處嫌はず、喰い付いて居るのだから堪らない。若し此儘にして置けば、我が最愛なる同胞は、皆近き將來に於て此の惡魔の爲めに喰ひ殺されて了ふに極つてゐる。大變だ。

醫者と云ふものは、こんな大事の時には何の役にも立つものではない。偶々ペスト菌でも發見すると、鬼の糞でも拾つて來た様に大騷ぎをして喜びまはるけれど、近所にヒキツケた子供でもあると、病人よりも此方の方で目を廻し、亞鉛の塀の傍から子鼠が一匹出て來れば、泰山が鳴動した様に吃驚する先生達に、此の『大人病』の病源や治療法が判つて堪るものか。されば也。我輩をして姑く『大人病』發見者の名を擅にせしめよである。呵々。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『此品、粗末ながら、御目に懸け候間、御取捨て下されたく候。頓首九拜。』

『大人病』の患者は常に此ういふ事を書くのである。贈り物に添へて、此ういふ手紙を受取つた時、何とも異樣の感を起さない人があるならば、其人は既に立派な『大人病』の患者である。自分が知らぬ中に、何時しか此の怖るべき傳染病に魅入られたのである。諸君、虛心平氣に此の手紙を見たまへ。彼は今、粗末なる物を贈り來り、而してそれを捨てよと望んで居るのでは無いか。此く言はゞ諸君或は笑ふかも知れぬ。それは單に辭令に過ぎぬのだと。成るほど辭令である。辭令であるが故に諸君は虛僞を言ふ必要があると思ふのでせうが、さすれば、此うも言へる筈だ。『時下寒冷日に增し、東京市中の人間皆な凍死致すの候、益々御多祥、朝に南極に至り、夕べに北洋を超え、南船北馬、東奔西馳、世界中を丸呑みに遊ばさるべき御計畫の由、大慶斜ならず、煙火二十一發を打揚げ、三鞭酒百ダースを置き、五斗入の大杯を擧げて賀し奉り候。』いくら辭令を巧みにするとて、まさか心にも無い虛を書かずとも濟みそうなものである。トコロが『大人病』の患

者には、如何しても此な工合に書かずには居られぬ。ソコデ、『粗末』な物を呉れたり、『御取捨て下された』かつたり、『お目に懸け』たり、『九拜』したりするのである。

『大人病』の婦人が他家を訪れた時が面白い。

『どうもネ、貴女、此頃は家が忙がしいものですから、ツイ〳〵御無沙汰ばかり致しましてネ。』

虛を言つてらあ、朝から晩まで大道へのたり出た蚯蚓の樣に、家の中にゴロ〳〵して居た癖に。

『あんまり長らくお目に懸れませんので、どうして居らつしやるだらうつてネ、朝晩、良人と申し暮らして居りましたんですよ。ナニネ貴女、いくら出やうと思ひましても、それからそれと、種々な事が出來て參るもんで御座いますからネ。もう今日はホントに我慢が致し切れなくなつたものですから、不斷着の儘で飛び出して參つたので御座います。オホヽヽ、御冗談ばつかり、こんな木綿ドンツクが美麗だなんて。ホントに寢間着の樣な物で上つたり何か、失禮で御座いますわ

ネエ。着換へて參る間も無かつたものですから、ツイ、眞平御免あそばせ。私、途々泣きながら歩いて來ましたわ、お目に懸れるのが嬉しくつて。ホントにお宅はマア何といふ結構なお住居でせう。私、こんな所に一日でも住つたら、千年くらゐ必と生きられるに違ひないと思ひますわ。」

此の筆法で一時間も喋舌られた日には、一年位は聽者の壽命が縮まるであらうと思はれる。出掛ける前に五時間も費して、髪を結ふやら、お化粧をするやら、隣家のおカミさんの晴着を借りて來るやらの大騒をしながら、不斷着のまゝだなんて云ふかと思へば、來るのが厭で亭主に追ひ出されてシブ〳〵來た癖に、嬉し泣きに泣きながら來たとは、實に思ひ切つたエライお世辭だ。

「イ、エ、もう何卒おかまひ下さいますな。イ、エもう戴いたも同樣で御座いますから。はい、今食べて參つたばかりなんですもの。オヤ、ホントに申譯が有りませんこと。然うですか。それでは一服戴くと致しませう。ホントにお介意い下さいませんと宜しいのですけれど。どうも澤山頂戴いたしました。もう如何しても戴かれませんのを。」

此く云ふ人が、喉から手の出るほどの思ひで居るのだから、驚いて了ふ。更に、其の故意らしいお壺口で、飯の一粒をも呑み下し兼ねたと云ふ風情を示されるのだから、あやに畏く又尊いでは無いか。

更に此の『大人病』令夫人の、御歸宅の樣を拜見しやう。

『ア、ア疲れて了ッた。面白くもない。碌ダマなものも出さないんだもの、腹が耗ッて堪りやしない。ホントに如何な鈍間か判りはしないや、もう戴けませんッてお世辭に言ッてやれば、ヘイ然うですかッて直ぐに引いて了ふんだもの。馬鹿に附ける藥は無いッて言ふがホントだネ。けれど、彼樣奴は胡摩化すのが容易で好いわ。ねえ良人さん、彼家も最う五六年だネ、折角の財産もアレじや遠からず潰れて了ふだらうよ。彼處の家内の愚正直にも驚いて了ふ。今日も今日で、いく

ら此方が惡意だと言ッて、自分達の惡るい事を洗ひざらひ廣告して居るとは、何といふ愚々しい事だらう。一生懸命に本氣になッて涙を零して、ホントに惡かッたなんて、何か此方に惡るい事でもしたのじやあるまいし、實に氣が知れないわ。愚だチエ。」

* * * * * * * * * *

「大人病」患者は、一體に不眞面目で、且つ甚だ無邪氣の德に缺けて居る。世の中の事を、何でも茶化して、上辷りして、同情が無く、放蕩で、淫逸で、陰險で、因循、横着で、狐疑の念が深く、いやに濟まし込んで、氣障な空世辭を並べ、大人ぶッて情を矯るのを得意にして居る。「武士は食はねど高楊子」とか「腹が耗ッても空腹うない」とか「良人の戰死は國家の爲ですから悲しくはありません。」とか「紳士」とか「令孃」とか云ふ言葉は、皆「大人病」の言はしめる無意味千萬の言葉である。

「大人病」に罹ッた人は、お客の前で眠いのを怺へて「イ、エ何ともありません。」といふ人である。イクラ貧乏でも他人の前には綺羅を飾らねばならず、イクラ辛くとも笑顔を見せねば相濟まぬ御方樣である。そして「お轉婆」と云はれるのが恐ろしさに、お孃さんは好きな馬乘りが出來ず、「百姓」と云はれるのが厭で、息子は好きな花つくりも出來ぬのである。

我輩は敢て言ふ。「大人病」は人類滅亡の一大誘因であると、而して此の亡國的惡疫が到る處に流行して、少年少女にして既に之に感染する者の多きに至ッては、實に寒心に堪へぬ次第ではないか。お互に深く戒めて此の病毒から免れたいものである。

「大人病」の病源は、思ふに第一が貧富の懸隔と、極端なる自由競爭制度の生活に在るらしい。生馬の眼を拔いたり、內懷の大枚を掠拂つたりする修羅場の此世では、無邪氣にするものは多く出し拔かれて失敗し、愚正直の者は昇がれてやり損ふといふ工合だから、自然人情が卑劣醜陋に流れて、眞面目とか眞摯とか云ふことに遠かるのである。此の傾向は日本ばかりでは無

いが、歐米諸國の人情を見ると、また〳〵無邪氣で眞面目な分子が多い。して見れで、日本も、やり方一つで、最少し此『大人病』の流行範圍を少くすることが出來るであらう。根本の問題としては、外的には、經濟組織を公有制度に移して貧富の懸隔を絕滅し、內的には、敎育を旺んにして大に人心を新たにすべきであるが、目前の策としては、先づ此の主意を以て、最も親しき間柄の親戚知友を語らひ、嫉妬、排擠の考を去りて、赤子の如く、赤裸々の交際を試みるがよい。時には喧嘩ぐらゐしても介意はぬ。明日になッたら又仲よくして、其日〳〵に交情を溫めて行ッたら、どんなに樂しい事であらう。

彼の、家庭にオルガン、バイオリン、又はテニスの道具、歌がるた、などを備へて、精新、無邪氣にして且つ眞面目な樂みをすることは『大人病』驅除の一方法として、我輩の双手を擧げて贊成する所である。

●通常人一日の滋養分

▲人は每日種々の勞役に從つて、此活世界に活動しなければならぬ役目がありますが、一體此活動の資本は何處から供給されるかと申すと、夫れは全く日常の食物にあるのです。

▲日本人は西洋人に比して、一般に早く老年になり、最早や五十六十になりますと、仕事を厭ひ、樂隱居を致します。西洋人は老いては腰も曲らず、壯い者と同じ樣に活動するのですが、勿論是には種々の原因も御座いませうが、一つは日本人が常に粗食をして、過度に腦細胞を使ふのと、西洋人が比較的滋養分の豐富な食物に依りて、絕えず腦細胞の消失を補つて居ることは、確に其一因でありませう。

▲通常人が一日間の勞役に堪へる丈の、活動の資本を得やうとするには、先づ牛乳一合に味噌を五匁、野菜五十五匁に肉類を六十匁、夫に白米四合程でよいので、之丈あれば完全に健康體を保つて、體質の損耗を防ぐことが出來ます。今之を分析して、其滋養分を調べて見ますと、蛋白質二十七匁、脂肪八匁、炭水化物百二十一匁となります。

▲亦牛乳の代りに卵を二個と、野菜五十匁と、魚肉を六十五匁に、白米四合を用ふるとすれば、其滋養分は、蛋白質が二十七匁、脂肪が五匁、炭水化物が百十九匁の割合になります。兎に角此程度を以て、食品を調理しなければなりません。殊に人間の胃と云ふ物は、眞に勝手なもので、每日同じ物ばかりでは、決して承知しません從つて滋養分を吸收する點にも、影響を及ぼします。料理法が大切なのも全く此爲です。或る人が新婚のお嫁さんに向つて、常に其夫の笑顏に接し、幸福の家庭を造らうとすれば、一週間の食物を、常に變つた方法で料理して獻立をせよと申された事が有りますが、之は實に一理ある事と思はれます。

○さて蛋白質と脂肪と炭水化物の三者は、體內機關の消耗を補ひ、油の切れた齒車に油を注ぎ、絲の切れやうとする機關消具の、其絲の縫目を強くする樣、絕えず人の體內を循環して居るのであります。

玉匣（友の新婚を祝する歌）

山口孤剣

怒濤逆捲く荒磯に
白き花藻も匂へるを
黄沙に曇る北漠に
青き樹蔭のなからむや

潮に濡れし青貝の
頰おとろへし若き子も
歡樂まろき杯を
春の泉に酌みしかな

若葉に咽ぶ白鳩の
淸き瞳の新郎が
愛の灯火かゝぐとき
胸はも花の彩渦に

羊のごとき新妻が
眉、美はしき光に流れ
綾の衾に玉匣、
いみじく匂ふ春鳥や

胸の新潮うづまきて
歡樂の海にそゝがずや
平和の白帆かゝやきて
生命の島ぞ美しき

黒髪長き優肩に
人生を整ふる力あり
白玉の肌に櫻頰に
天地を燒く炎あり

いまし宇宙も歡びて
流露とほくながれつゝ
深夜の呼吸もひそやかに
生命の花をまもるかな

夢の香淸き天の戸に
想像の花の深ければ
匳ぶる島の翼にのり
かへれよ愛の故郷に

家庭園藝　二葉

○園藝行事（十二月）

種子の採收及び藏貯に注意し、秋蒔物及び花卉の保護を怠らぬやうにせねばなりません。而も猶ほ左の課業があります。

▲播種するもの。
枳殼、柚など。

▲移植するもの。
石榴、無花果は此節より翌年三月下旬迄。苹果、桃、梨、櫻桃、プラム、胡桃などは同じく二月中旬迄。

▲肥培するもの。
菠薐草、韮、春葱、蒜、豌豆、麥類など。

▲收穫するもの。
蕪菁及び一般菜類、葱、大根、肉桂の子など。

▲堆肥及肥土製造。
これは少し草花や蔬菜を作らうとするには是非なくてはならぬもの故、落葉、塵芥、俵や藁屑など淺く簡單に堀り埋めて來年の用に供へられよ。

○冬咲きの草花

此頃から二三月までの寒い間にも、箱室で少し手入をすれば容易く美しい花が作られます。箱室と云へば大層に聞へませうが、上を覆ふ玻璃障子丈け人の手を煩はせば、後は手細工でゝも出來る四尺に六尺乃至一丈位、そうして前方一尺後方二尺位の高さの木框であります。つまり前々號草花の蒔き方中『簡易なる溫室』と題して申上げたものに過ぎませぬ。さて此箱室を使用するには、据える地面を七八寸堀下げ、馬糞を入れて蹈み付けて、上へ肥土を置くとよいのですが、面倒ならこれは省いても構ひません。されば庭の隅でも、書齋の向ふでもよいから、日當りに据え、下が濕地ならば堀下げずに根を高くし、中へ土を多く入れゝばよろしい。斯のやうにして直ぐ苗或は

球根を植え込むのですが、其草花の種類は、

フルシヤ、エキスヤ、ヘリオトロリユーム
香菫、何撫子、ジレニヤム、ロースジレヤム、
水仙、福壽草、雪割草、

などは主なるものです。皆な種々の變種はありますから成るべく美しいのを撰ぶは當然だが、種子や種球は皆な安價なものです。そうして、ジレニヤム、ヘリオトロリユーム、香菫などは今頃早や咲きかけ、フルシヤやエキスヤが遅いとは云へ、二月頃には咲き始めます。これ等は、メルデンヘヤ(一名アジアントン)と云ふ葱に似寄つた草を交じへて、盛花や襟さしや踊り花などに使はれるのであります。

右は、箱室に直ぐ植ゑるものとして申上げたのですが、始めから五寸位の鉢に植ゑたのを箱室へ入れると、咲いたのを鉢ごと出して室内の適當なところへ運び込んで眺められて、一段都合がよいやうに覺えます。そうして生育もよく四尺に六尺の箱室でも、優に五六十鉢を容れられます。

手入としては、先づ時々油糟の解き汁の薄いのをやればよい。また時々ぬるま水を灑けてやつたり、晴天には玻璃障子を取り除けて風を入れたり、夜は蓋の上から蘆簾又は蓆のやうなものをかけて、溫くしてやらねばイケませぬ。猶はまた箱の中へ植ゑ込み、或は鉢を入るのは十月の末にか、十一月の初めにするのがよい。また晝間花を眺める爲に出しても、夜間は亦た箱室へ入れて置かぬとイケません。

○花の友へ

▲牛込の自然兒君へ。自然研究欄を設けて日用理科に關することを私に書けよとの御注文は、貴君初め熊本の冏向君、大阪のゆり子君等のお望みもありましたから一應考へて置きます。仰せの通り家庭の迷信を排り、眞習慣眞趣味と新思想を得るには自然研究は寧ろ家庭園藝以上でせう。米國では是を都會熱減少の上にさへ應用して非常の効果を得て居ります。併し一方家庭園藝や小兒の土いぢりは漸く盛になり文部省では「學園」をこしらへよと、今更全國各學校へ言ひつけたそうです

▲甘谷鎮郎君へ。北韓の植物種子二種、唯君から確に戴きました君の清高な趣味に感服した私は、手落なく育て上げてみる覺悟です。御健在を祈る。

▲土佐の瀧澤君へ。扨て御寄送の滿州蕃椒は見事に出來ました、觀賞用としては實が早く腐敗する爲めよろしくないやうです。味は如何か私では賞味し得られませぬけれどお好きな方へは種子を上げますから試みて下さい。流石内地りと變つて居て、出來易く、形も面白く、澤山生り下る風はまた格別です。

花守日記（その一）

二葉生

一

鷄に飯を與へ、こつ〳〵拾ふ樣を見入つて居れば、何處からとなく一種の清香が浮動し來つて、心神は頓にすが〳〵しい。何處から何の香だらうと、こんどは狹い庭をぶら〳〵廻り出した。すると前栽の隅に、象て自分の植えた木犀草が、露霜に撓みもせず十株ばかり一團に咲きほこッつ居る。先きから清香を送つたのは、蓋し此花であッた。

褐色の蕋と細く切つて白く小くもじや〳〵になつた二瓣の瓣とは頗る質素で、提燈形の實は葉陰に半ば隱て、小風にちろ〳〵動きながら、獨り天眞を全ふして居る、自分は此草花の健氣な樣をみて、何んとも云ひ知らぬ感に打たれた。

始め此草の名が「木犀草」といふので、どんな花が咲くだらうと好奇心から作つたところ、第一年目は「こんなつまらぬ花、徴けき匂ひ」と蔑視して、つれなくも我が花園から排斥してしまつた。すると二三年を經、例の自然研究の方面から、花の解剖をやつてみると、瓣や蕋の形の奇妙なところ、實の形、種子の着き工合などが、他の花に視られぬので。顯微鏡下の美妙なるものとし、また〳〵花園の一員に加へた。そうして今日といふけふ、漸く其天分の高きに驚き入り、そゞろ敬虔の念に打れたのである。

四五年前スキートアライサムを試みた。が、矢張木犀草の流義で、花の終らぬ中に花園から除いてしまつたと記臆て居る。それが此春、札幌の三瀬兄から種子を下さつたので、こんど研究的に作ッてみたところ、ちよつと見たところつまる花でない、そこで早速三瀬兄へ「餘り質素な花だが、他に効用はあるのではなからうか」と質問した。すると「何人も左樣尋ねるが、花を嗅いで見玉へ、寧ろ木犀草に優ると思ふ」と敎えられた。

萬事幼稚にして未熟な花守先生、成程と俄に感服し、其後大事に育て今日になつた、ところ、僅か五六株でありながら、どれも枝を打ち、梢に梢を生し、榮に榮て、花は新梢から新梢の頭に、簪のやうに多く咲いて長く絶えず、而もそれが純白十字形で宛然星の降つてなせる一團かと疑はれ、質素で小さいのは却つて優し

く愛らしい。そうして一種の芳香を放つところ、實に木犀草に劣らぬ天分を盡くして居るのだと思へば、なんとなく襟を正されるのである。

二

磯菊を採集しての歸へるさ、坂路を辿り何心なく徑を出ると畠の畔に出た。すると芝の上に小兒が一人、すや〳〵眠入て居る。小春日のまばゆい日光に顏をそむけ、小さき手には野菊を一枝持つて、夢路は今しも何處を辿るやら、蜻蛉が一羽顏の上を横ぎると、微かな笑がこぼれた。何んたる美しい可愛い圖であらうと我しらず脚を留めて覗入つて居ると、横合に談聲がする。さてはと顧みて茅を透せば、耕す夫に栽ゑる妻。

「これ丈け栽ゑりや家で喰つても、まだ澤山賣り出されませうの……」

「おまへ亦負つて城の腰へ賣りに行くだ。」

「あゝ、そうして坊とお前さんの着物にする綿糸でも買ひませう。」

拔人神の畫家ミレーの筆に上つたのも、此一幅の活畫に外ならぬ。予は更に、彼等夫婦が兒の手をとり、夕影長う曳いて、家路に辿る景色に想ひ及ぶと、唯だ恍惚してしまうのである。

三

蜜柑畑で鋏の音がパチン〳〵したと思つたら、淸ちやんの指傷が治つて、はにかんだ笑がこぼれる。間もなくオバさんが三つ四つ持つて出て來られると、內の秋坊も戴いて、今しがたさ〳〵轉げ去つた落葉の趾へ、云ひ合はしたやうに二人ともころ〳〵と投げ出し、椽に跼んで行く方を見据えて居る、そのあどけない風が如何にも可笑しいので、爲すに任せて居ると、間もなく納家の屋根へ雀が二三羽やつて來た。すると秋坊は蜜柑を捨て丶チュッ〳〵と、餌を漁る雀を指しトウトウ〳〵、ウム〳〵戴々と云つては掌を重ねる、例の如く欲しいから呉れといふのだらうが、困つたことには羽があつて蜜柑のやうに鋏でチヨッキリ切られぬ。彼れこれして居る中に奥から坊の母ちやんがお出なすつた。するとこんどは急に立ち上り兩手を廣げて、だつこ〳〵と云ひ出した。やがてそれも叶ひ、椽臺に腰をかけた母ちやんの膝の上で、土間に里芋をこしらへて居るオバさんと、バーをやつては喜々と笑ひ興じて居る淸ちやんは何時の間にか蜜柑を皮ばかりにして、遊びに行つてしまつた。

遊戯
忘年會

兒童多き家庭の娯樂に資せんとて、丁度季節に應はせた『忘年會』と云ふのを新案しました。尤もこの遊戯には單に遊ぶと云ふ事の外に、一種の意味を加へてありますから、只兒童丈に打まかせて置いては、左程に興味もなく、また利益もなからうかと思ひます。それには、年長の人―兩親でも兄でも姉でも――が常に顧問となり、監督となつて、面倒を見てやる必要があるのです。（淸山）

『忘年會』は最も賑やかな交際的のものでして、無論室内に在て遊興する事が出來、少年男女が相交つて一層の面白味を得る事が出來るのであります。

全體の趣向を簡單に約めて申しますれば――社會のいろ〳〵の方面の人が一夜相集り、その年の出來事や何かは一切記臆から捨て丶了つて、來るべき新春をば生れ變つたやうな淸き心と、進んだ考へとを以て潔く迎へやうとするのが忘年會で、此遊戯は即ちこれを土臺としてあります。

人數は十五名で宜しいです。その内で、十二名は社會の種々の方面から集つて來る人達ですから、各自にその職業が違ひます。假りに先づざつと次の如く定めました。

△官吏　△女學生　△新聞記者
△音樂師　△大工　△巡査
△按摩　△畫家　△看護婦
△貴夫人　△辯護士　△水兵

次に一人、其人の役名は『年の關守』と稱へまして、畢竟、今年で云へば、三十八年から三十九年に移るところを守つて居る番人を云ふのであります。但し、此番人は神樣が命じて置いたので、忘年會に集る人々より餘程立勝れた權利を持て居るやうに出來て居ます。

それから、其手には一つの『幸福の玉』を所持して居て、誰れでも、其關所へ一番早く來たものに、この玉を授けると云ふ仕組、申すまでもない事乍ら、一旦其『幸福の玉』を懷中したならば、其人は按摩であらうが、看護婦であらうが、職業の貴賤や、人物の如何に關係ない。其人は實に翌一歲を幸福に暮す事が出來るのであります。別の言葉で云へば、此遊戯の勝利者で榮譽

の至り、得意の頂上、豫て準備してある賞品でもあるならば、其賞品は挙て勝利者一人の手に渡るのであります。

さて、次には遊戯の方法です。初め十二名の人達が廣い一室に集つてテーブルを圍みます。テーブルがなければ圓を描いて座るも宜しい、一同が着席すると、豫め用意してある手札、即ち『官吏』以下『水兵』までの十二枚を裏向けて座の中央に伏せ、次にヂャン拳か何かで、順繰に其札を取上げる、取上げた結果で見ると、男で居乍ら『貴夫人』の札を持つて居る人もあらうし、女が大工に當つた人もありませう。そこで、此等の人々が改つて用意を調へ、すべて『按摩』なら『按摩』の心持となり、考へとなつて控へるのです。此遊戯を遊ぶには、此瞬間が最も緊要な時であります。と云ふのは、遊戯者が各自異つた職業の名を受けると、直に覺悟して其職業に就てのいろ／＼の事を考へ付かねばならぬからです。假令へば、『看護婦』の職名を被せられた人は、「看護婦は病人を世話して、藥などの名も知つて居らねばならぬもの。」だとか、或はまた「看護婦の服裝は大抵眞白な上衣で、頭も大抵束髮に結つて居る。」など、どんな事でもよろしい。苟くも看護婦の身に關する事で、誤りでなく間違ひでない以上、充分に想像して見るがよろしい。つまり、此遊戯の結果は、この想像の上手下手、考へのそんざいのと細かいのと、それに思ひ付きの速い遲いに依て定まり、從つて勝負もつくのでありますから、餘程の注意が要る次第です。

右の用意が遊戯者の頭に出來たものとして、これから少しばかり其現場の有樣を說明しませう。

先づ初めには抽籤で以て順番を定め、それから例の如く番號順に、自分の身の上、即ち職業柄の話を致すのです。そしてこれが遊戯の本題です。假りに一つ談話の實例を示しませう。

▲官吏の談話

『私は全體雨嫌で、毎朝出勤する時ざあ／＼と、云ふ音が外にして居ると、實に情なく思ふのが常であります。處が、私のこの雨嫌ひは施いて傘嫌ひとなり、雨

降の日は仕方がないとして、少々曇つて居るやうな日などには、決して傘を持つて行きません。「これはひよつとすれば歸りに降られるわい。」と思ひ乍らも、何だかつまらない持物のやうに思はれましてねえ。それで若し自分と一所に歩いて居る人が、重さうに、そしてさも大事さうに傘を持參して行くのを見ると、心私に笑つたものでした。「錢のない人はあれだ、何だ、雨位。雨が降つたら車と云ふものがあるではないか。僕を御覧と。」云つたやうに私の得意さと云ふのは御座いません。電車にでも乘つて居て、私以外の人が皆な申合したやうに番傘を持つたり、蛇の目を抱えたり、蝙蝠傘の用意をして居たりと云ふ間に、私一人悠然と手拱えて、雨天に傘も持たずに居る事を、それとなく顔で誇る時の愉快さと云ふものはなかつたのです。だが、其得意や愉快は只其時ばかりです。歸りには必ず降られます、只降られるばかりなら、左程の苦痛でもありませぬが、役所に居て折々ガラス越しに空合ひを眺めて居る心配はまた格別です。今少しもつだらう、少くとも家へ歸りつく迄は降らないだらう。」と自分勝手な想像して、内心ではびく〱物です。けれども天は正直で、降るべき時間が來れば乾度降ります。そろ〱退出時間前になると、窓側のトタン屋根にポツリ〱と云ふ音がして、それが二三分の間に非常な大雨となるのです。私以外の人は「とう〱降り出したか。困るなあ。」と云ひ乍ら、各自持參の傘を擴げて歸つて行きます。給仕迄が「左様なら。」と云つて歸ります。然るに私一人は取殘されて、人氣のないがらんとした役所の事務室にぼんやりと、空ばかり見詰めて居るのです。此様な困しさはまづないと云つても宜しい。やつと小止みになるのを幸ひに、ズボンの裾を折上げ、外套のボタンを緊乎と掛けて、屋根の下傳ひに歩いて行きますと、時には非常な水溜に出逢つたり、軒が途切れて、どうしても雨の下を行かねばならぬ事などがあつて、そのざまの惡さ、體裁の惡さと云ふものはありません。道行く人は皆な不思議さうに私の顔ばかり眺めて、「あの人はまあ此雨降りに傘も持たず、どうしたのだら

う。」と云はぬ計りの口付です。折にはまた空車を曳いた車夫が「旦那如何です、お安く參りませう。」など丶勸める。私は其樣な時大抵は横を向いて、知らぬ顏で通り過ぎるのが常ですが、事に依ると「えッ、此雨にどうして此傘なしで歸られやう。仕方がない散財だ、乘らう。」と呟いて、大奮發で乘る事もあります。併し其樣な時のつまらなさ加減と云ふのは格別で、車に乘つて居ても少しも樂とは思はず、早く家に歸りたいとも思はず、全くふて腐れで、世の中が厭になつて了ふのです。假令車に乘らずとも、身體中濡鼠のやうになると、私はほんとに情なく感じました。「雨空に傘を持たずと云つて威張つて居るのと、雨中傘を持たずに歩いて居るのと、どちらが智慧のある人と云へるだらう。」とつく／＼と思ひました。

實に私は誤つて居りました。私の心は全く見榮で以て滿ち／＼て居たのです。併し甚だつまらぬ見榮でありました。金でも澤山あれば兎も角、車に乘事も自由でないのに、雨氣の空を傘なしで行くとは何と云ふ心得違ひでしたらう。

私は斯樣に心得違ひをして居た今年をば、綺麗薩張と忘れて了ひたう御座います……」

これで、官吏の談話が了るのです。すべて、斯う云ふ風に、奇拔なこと、爲になること、可笑しいこと、等を其職業に應じて面白く話すのであります。そして、何れもその話の結果には「私は……今年を忘れて了ひたう御座います。」と云ふ一句を附けるのです。

以上は只一例のみで、其外『女學生』『新聞記者』『音樂師』と數々ありますが、併しまたそれ／＼に就いて面白い談話の仕組が附かぬ事はありません。これは全く其人の頓智と、辨舌と、才と、見識とに依て、談話に天地の差の付く次第で、そこがまた此遊戲の面白い處であります。

さて、十二名の人々がおの／＼得意の談話をして了ふと、今度は今迄聞いた内で一番有益で、そして趣味に富んだと思ふ談を選んで、一番から五番まで點數を附け、それが濟むと、次には皆なで其點數を調らべ、一番點數が多かつた人が、前に申した『幸福の玉』を關守から貰ふのであります。

續手に申して置きますが、前に擧げてある十二種の職名は必ずしもあの通りと限つた事はないのです。思ひ付き次第で、どう變へやうと、それは遊戲者仲間の適宜であると御承知なさい。以上。

クリスマス

基督教國のクリスマスは、我國で申すと先づ正月か盆のやうなものであります。實にかのクリスマスのプレゼントなる物は、啻に趣味娯樂と云ふ意味ばかりに止まらず、兒女一年間の行爲を善良に支配する程の勢力を持て居るもので、其風教上の効蹟や全く計り難いものがあるので御座います。殊にかの孤兒院、貧民院、慈惠院等の院兒の如き、不幸にして天の恩寵に浴する事の出來ない人の子に對しては、競つて夥しいプレゼントの寄附をするの例ですが、これなども、同じ義捐の行爲とは云へ、日本國民が徒らに素性も知れぬ神佛に寶物や金銀を捧るのとは非常な相違があります。即ち日本で云へば、一身一家の幸福を願ふとか、商賣が繁昌するやうにとか、何れにか賤しい考へが蟠つて居るのですが、引代えてクリスマスのプレゼントは、全く一視同仁の心に動かされ、人類の福樂を喜ぶ心に導かれて、發するのであります。彼等の家庭は春の海の如く穏やかに、夏の朝の如く清らかに、將たまた、十月江南の野邊の如く温かに、大人も小兒も、雇人も、上下の別ちなく、親疎の隔てなく、プレゼントや食卓やに嬉々として相樂むのであります。それ斯の如くして、わがクリスマスは活たる人生に一種のアクセントを與へ、吾人の心には、また清醇なる良感化を與へるのであります。

次に一つクリスマスの話を子供の爲に掲げませう。これは、植村あい子姉より寄せられたのであります。

○

『あゝ明日は樂しいクリスマスだ。會堂では嘸面白い事があるだろう。奇麗な贈物もあろう。はやく日が暮れゝば好いナ。』と待ち兼ねた姉と弟は、七時の時計の鳴らぬ内に、寢床に入りました。けれども明日の樂しいクリスマスのお祝ひの事をいろ／＼と考へては、嬉しくつて、眠れません。弟の太郎さんは、枕もとの靴下を探つてゴトゴトと獨語。

『明日は此の内に、何が這入てゐるだろう。奇麗なカ

ードかしら。カードなら日曜學校の先生が下さるのと同じかしら、同様であつたら無益いナア。お菓子かしら。羊羹カステラ西洋菓子かしら。お菓子はお母さんが毎日お茶に下さるから、同様では厭だナア。凧は大きいから這入りはしない。書物かしら。書物も大きい、帽子かしら、帽子も大きい。サンタ……サンタ、何と云つたつけ、サンタ、クロウと云ふ人が、今夜來ると云ふが、眞實かしら、姉さんの靴下は、僕のより大きいから取替ておかう。サンタ、クロウが佳品を入れる時に大きい方が善いから……姉さんなんぞ女だから小さくても構ふものか。容物が大きければ佳品も澤山這入るだろう。好いナ……アア早く寢よう。」

と、夜具の中に入りましたが、又も大きな聲で、

「お母さん、サンタ、クロウは何處から來るのですか。」

母親は襖戸を隔てゝ、明日のクリスマスに着て行く衣服のリボンをつくろつて居りましたが、

『太郎さんはまだお寢らないの。サンタ、クロウなど云ふ人は母樣知りませんよ。」

『デモ日曜學校の先生が、サンタ、クロウは、烟突から、座敷の中へ、來ると云ひましたよ。』

母親さんは笑ひながら、針の手を止め、襖の方を向て、

『サンタ、クロウと云ふから了解ないわ。英語でサンタ、クロースと云ふ老翁さんのことなの。』

『左様、左様其の老翁さんは何處から來るの!? 大黒様は惠比須様と相談して、正直な家の神棚へ移住をすると言ひますが、大黒様もサンタ、クロウスと云ふ老翁さんと同様ですか?』

『サンタ、クロウスも大黒様も眞實の御話ではありませんの。』

と斯様に話してる中に、太郎の返事の聲も、聞えず、二人の靜かなる鼾となつて、クリスマスの前の宵も大分更けて來ました。

お母さんは莞爾とうち笑ひ、ソツと襖を押開け、二人が枕もとに置いてある、靴下の大きい方へ、可愛い人形を入れ、小さい方へは、かねて太郎が好きな銀の

風琴
洋琴

月賦販賣　賃貸交換　修繕調律



松本樂器合資會社

製造所　東京市京橋區新湊町五ノ一

販賣店　東京銀座四丁目四番地

電話新橋　二二九八番

(定價表)

ピアノ		
壹號	A	円 280.00
仝	B	300.00
仝	C	330.00
貳號	A	300.00
仝	B	350.00
參號	A	350.00
仝	B	380.00
四號	A	400.00
仝	B	450.00
五號	A	500.00
仝	B	550.00

オルガン		
デスク形	第壹號	円 20.00
仝	第貳號	30.00
仝	第參號	33.00
仝	第四號	45.00
仝	第五號	45.00
仝	第六號	53.00
仝	第七號	63.00
仝	第八號	75.00
仝	第九號	85.00
仝	第拾號	100.00
普通形	第壹號	円 17.00
仝	第貳號	27.00
仝	第參號	37.00
仝	第四號	46.00
仝	第五號	48.00
仝	第六號	56.00
メーソン形	第七號	66.00
仝	第八號	77.00
仝	第九號	90.00
仝	第拾號	100.00
仝	第拾壹號	120.00
クラウン形	第拾貳號	150.00
仝	第拾參號	180.00
仝	第拾四號	200.00

「松本樂器目錄」御入用の御方は郵券貳錢御送付あれ

●齒科治療 自午前八時 至午後六時●

神田區須田町二十六番地

齒科醫 吉瀬才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意

晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

◉眼科診察 毎日 午前◉

京橋南佐柄木町五
(電話新三四五八) 川上眼科院

外科皮膚病 梅毒 痔痳 外科的婦人科尿道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際 出雲橋 加藤病院

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸 毎月曜午前中

東京神田區駿河臺鈴木町二番地(御茶水橋畔)

電話本局八八八番 一三八五番 東洋内科醫院

院長 醫學士 高田畊安

診察 毎日午前但日曜日及大祭日休業、入院診斷後隨時應需、火木土曜、窮者施診○病室增設落成

神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎海濱 (停車場所在) 南湖院

副院長 醫學得業士 林止

診察 院長出診土曜日午後、副院長診察毎日午前、但日曜日大祭日休業、入院診斷後隨時應需、土曜日午後施診

東京麴町區三番町三十番地 (市ヶ谷停車場附近) 高田病院施診所

主任 醫學士 松田三彌

診察 毎日午前。但日曜大祭日休業、窮者ニ施診ノ上其病名及養生法ヲ示シ處方箋ヲ與フ○往診應需

診察
磯部
日本橋濱町三の一

外科皮膚病
梅毒痔痳

午前
検
中の橋通り東入
三

産科 婦人科

横濱市眞砂町二丁目廿六番地

朝長(ともなが)鷹二郎

診察毎日午前

帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通り
（電話 新橋）八一六番 二八〇八番

飯倉四ッ辻 飯倉支店 電話芝一五七番
赤坂表一丁目 赤坂支店 電話新橋二〇六八番
四谷大通り 四谷支店 電話番町五一〇番
牛込神樂坂 神樂坂支店 電話番町六三〇番
本郷一丁目角 本郷支店 電話下谷七二番
神田須田町 須田町支店 電話本局二〇七三番
兩國米澤町 米澤町支店 電話浪花二五九〇番
淺草吾妻橋通 吾妻橋支店 電話下谷七三番
南品川一丁目 品川支店 電話新橋一一三九番
横濱吉田町 横濱支店 電話横濱一一三〇四番
日本橋坂本町 代理店 田中銀行 電話浪花二四〇番

輕便 瓦斯の煮燒 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を使じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

◎三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十六分にて炊くを得べし

◎瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用便利也

◎工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

◎臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種式新器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所さへ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



東京神田錦町 東京瓦斯株式

小刀を入れ置いて、元のまゝ二人の枕下に置きました。この時、お母さんは薄暗い處で、靴下の大きい小さいと云ふことばかりに注意けて居りますゆゑ、これがすり代えてあると云ふ事は全く氣が付きませんでした。

其の夜も明けて二人は目覺め、各自が枕の上を見ましたれば、靴下の中には、果して好い物があります。二人は嬉げに出して見ると姉さんには光つた銀の小刀太郎さんには可愛い美しい人形………まア如何した事でしやう？其時太郎さんは泣き出して、お母さんの室へ驅けて行き、「姉さんには輝つた銀の小刀で僕には斯樣な人形なんか、サンタ、クロウスも氣の利かないお爺さんだ！。」とベソをかきながら話しました。

お母さんは不思議に思つて、其間違を能く／＼質して聞きますと、太郎さんが慾深く思つて、姉さんの大きい靴下と自分の小さい靴下とを取り替へて置いた事が判りますたので、お母さんは、

「太郎や、サンタ、クロウスと云ふお爺さんはね、正直で、慾の深くない可愛い子供が好きなのですよ。太郎は正直で、そして可愛兒ですけれしたばかりで、此のクリスマスにサンタ、クロウスの贈物を貰ふことは出來ませんでした。今日からは餘り慾深いことをしてはなりませんよ。銀の小刀と人形は姉さんが貰ふのです。」

とて小刀も人形も姉さんのものになりました。

そして阿母さんは太郎が常に正直で、可愛兒だと云ふので、市へ太郎を連れて姉さんと同樣の輝いた銀の小刀を買つて遣りました。太郎は嬉しくて、

『阿母さん、眞實に有難よ。もう慾深いことはしません。僕が惡う御座いました。此の次のクリスマスには、眞實に正直で慾深くない善い兒になつて、サンタクロウスから澤山な贈物を貰ひます。』と言ひました。

來らんとする樂しいクリスマスを祝はんとする男兒達と、そしてお孃さん達は聖書の「已が事のみを顧みす、人の事をも顧みよ。」「不義の財寶は益なし。」「已の施られんとする事は人にも其如く施よ。」と云ふ聖句は共に味ふべきであります。

○將來の婦人（下段英文の意譯）

金子ジヨセフイン・コンガー氏寄

松林より來る空氣の淸きが如く、
　彼女を包める心靈の香氣淸し。
熱帶の百合と薔薇との美しきが如く、
　彼女を眺むる目の迷ふばかり美し。
女の心のありたけ柔しく、
　同情深きが故に智慧も亦さとく。
家内の事務には善く習熟して、
　心中の歡喜、常に色に現はる。
正義の念おのづから強くして、
　部分と全體とを見るの明あり。
火山の底にも溶けざる大理石の如く、
　心中の妄念に對して甚だ堅固に。
端正にして純潔なることは白き水仙の如く、
　地上の女王となり、人間の敬慕を受く。
子等の爲には母、夫の爲には友、
　疲れたる者の爲には杖、盲目の爲には光。
是ぞ不朽の神の十全の工にして、
　圓滿具足せる婦人なる。
是ぞ即ち今の世の奴隷婦人を救ふべく、
　此の世の爲に降るべき女神なる。

（此の詩の作者は、曾て屢本誌に寄書せられたる米國紐育の金子喜一氏の新夫人（米國人）にして、喜一氏と共に熱心なる社會主義者なり）

The Coming Woman.

By Josephin Conger Kaneko.

Sweet as the air from the forest of pinetrees;
　　Sweet is the aura of soul that enfolds her.
Fair as the lily and rose of the tropics;
　　Enchantingly fair to the eyes that behold her.
Tender as heart of a woman can make her;
　　Wise with the wisdom that sympathy brings.
Learned and skillful in matters of home life;
　　The joy of living within her soul sings.
Strong with an inherent knowledge of justice;
　　Able to see both the part and the whole.
Firm as the marbles uncrushed by Vesuvius;
　　Is she to the motives that prompt her own soul.
Upright and pure as the white calla lily;
　　The Queen of the earth and adored of mankind.
A mother to children, a companion to husband;
　　A staff to the weary, a light to the blind.
This is the perfect, the composite woman;
　　The Consummate work of the Infinite God.
This is She who must come to the world-need;
　　To upturn the old paths that the slave-woman trod.

華美なる生活

一家の經濟をその收入額以內に置く――これが磯谷夫婦が最初家を起した時の理想であつた。然るに、其後幾年月を經來つた今日に於て、其理想の光は何時とはなく薄らいで、數子の心には端なくも忌むき敵影が顯はれた。

「妾はもつと身分の高い人と交際がして見たいとよ。」

誇りと慾とは油然として胸底に湧くのを覺ゆるのである。尤も、新しき建築の立派なる玄關構は、何かに付け便宜と利益とを正雄に與へた。多い患者の中で藥價の拂えぬと云ふやうな貧亡人は一人もなきのみならず、時には非常な金持の家から往診を賴みに來るともある。現に村井氏と呼ぶ資產家の主人は、大熱病に罹つて今にも危篤と云ふところを、正雄の匙加減で運よく救はれたので、以來正雄は殆んど其家のお抱え醫師のやうになつて居る。

收入額の增加するにつれて、一家の生活狀態も著しく變つて來た。就中、其子供等に要する費用は幾何程嵩つても厭はぬ。子供を敎育する事は磯谷夫婦の第一の念願であると云ふので、特更名譽の高い學校を選ぶのである。其樣な事から、自然上流社會の人々と面を會はす機會も多くなつて、驚くべきは金持の家から美しい舞踏會の招待狀を受取る時さへ屢々ある事である。丁度隣屋敷は利光家の邸宅で、數子は何時か其夫人と親密なる友誼を結んだ。恐らく數子が眞に當世風の贅澤な華美な生活の有樣をまのあたりしたのは、此利光家のが初めてゞあつたのだらう。數子の目には全く新世界が開けたやうなものだ。今迄は念頭にさへ置いた事もない儀式や習慣を、彼女は親しく接近してこれを見た。見て第一に學んだところのものは、御馳走の時にはナプキンと銀製のフォークとを用ひねばならぬと云ふ事であつた。――利光夫人は決して鐵のフォークを手に持たぬ。すべて斯う云ふ風に、數子に取つては見るもの聞くもの、一として新奇ならぬはなく、綺麗ならぬはない。彼女は云はば派出なる生活

の方法を學ぶ學生であつた。但し、その必然の結果として、一家の支出は知らず〳〵の間に著しく增加した。而も、尙ほ彼女はその贅澤なる生活が、現在の身分では力に餘る六ヶ敷き望である事を考へて嘆息するのであつた。假令へば、ブラッセル製の毛布、室內用大ランプ、など云ふ品物は、餘りに其價が高きに過ぎて、如何にしてもわが手に入らうとは思へぬ。

「利光さんなぞは何程財產がおありになるのですか、全く底が知れないのでせうねえ。」

數子は或日利光家を訪問して歸へると、急いで夫を見出して斯う一口羨しさうに話し掛けた。

すると正雄は存外に輕く受けて、

「いや、其觀察は數さんの誤りだ。利光君の家の收入は大抵定つて居るさ。僕の家等よりは却つて少ない位だらう。」

「えッ、妾共のより少ないと仰有るの? では伺ひます。どうしてまあ彼樣に御綺麗に部屋なにかを粧飾なさるでせう。」

「さあそれは僕も知らない。だが何でもあの夫人は非常に經濟が上手ださうだ。利光君自身でさう云つて居るもの。だから僕も數さんに望みがあるねえ。第一この點をいろ〳〵と研究して、利光夫人の奧の手を自分で考出して貰ひたいのだかどうだらう。」

事實利光夫人の腕前は、ないものをも有りげに見せると云ふ、所謂遣繰と繕ひの術に長けた人であつた。數子は正雄から自身で研究して見るが善いと云はれたのを、翌日早速本人から其直傳を敎はる事となつた。

夫人は滿足らしい顏付をし乍ら、

「第一妾達が此世の生活に望みますところは、華美な當世風の暮しをしたいと云ふ一念で御座いませう。で、それには、先づ其手始めとして、何う致せば宜しいでせうか。貴女がこの妾の遣り方をお聞きになつたら、嘸吃驚なさるでせうが、實際一通りの苦心ではないのですよ。一口に申せば、少なく拂ふこと。始終そればかり心掛けて居るのですね。一體貴女は女中に如何程給金を遣つて入らつしやる?」

數子は全く煙に捲かれたやうな心地。ありの儘を正直に答へると、
『まあ大した御給金だこと。其樣な高い女中を誰が雇ふものがありませう。奥樣、妾が善いお針を一人周旋致します。一日十二錢遣れば澤山ですよ。尤も、斯うは申しましても、衣類の方で儉約なさいとお勸めしたのでは御座いませんよ。いくら儉約するからとて毎日木綿物を引掛けて居るなぞは、妾大不贊成です。考へて御覧なさい。それでは第一相當の收入のある旦那樣に對しても失敬ぢやありませんか。ねえ。美しい衣裳が着られる身でありながら、態々着ないで醜い服裝をして居るなにか、餘程可笑しい事と思ひますわ。』
『左樣で御座いませうか。何だか存しませんが、どうも月々の支出が普通より多過ぎるのですよ。子供の教育費が實は少し多いかと思つて居ります。』
『お子達の教育費？　それは飛んだお間違ひで御座います。子供を寄宿舍などへお入れになるのは、お金を捨て丶惡い習慣を覺えさせるやうなものです。それは早速御自分で教育なさらなければなりませぬ。』
『でも學校で教はる通りに教へる事が出來ませうか。』
『まあ貴女にも似合はぬお言葉ですこと。子供にお稽古させるのに、實の母と赤の他人とどちらが宜しう御座いませう。』
數子は全然利光夫人の意見に贊同したとは云へぬけれど、兎に角、子供等の學校費が莫大なものであることは爭はれぬ。正雄もこれを聽いて道理と思つたらしく、終に二人は同意して子供等を數等卑い學校へ引下げることにした。收入以内に於ての生活ではない。收入支出、手一杯と云ふ生活の狀態に進んだ磯谷家は、直にその刑罰を子供の教育費の上に甘受せねばならぬ事となつた。但し、此夫婦は必しも子供に增して贅澤品を愛すると云ふ理ではない。經濟上實に止むを得ぬのであらう。

さて、子供の教育費縮減の結果は、間もなくそれか他の形となつて顯はれた。他の形とは何であらう。質素な服裝の細君が、當世風の貴婦人となつた事である。

即ち元祿模樣の三枚襲、厚板の丸帶、寶石入の指環、ブローチ、羽衣ショール、派出な手套、オペラバッグと云ふ順序で、數子も吾乍ら美しさに見惚れて居るのだ。正雄は正雄で、從來は淑德と無邪氣な性情とに妻の美點を見出して居たものを、今度は其輝くやうな婀娜姿に誇りの心を動かして來た。然り、この誇りの心、この心一度び郎君の胸に湧いては、其美を見る眼は徒らに錦に輝き、黃金に映るばかりである。

數年の間、此世間は只二人の爲めの世間であつた。そして、今では世間の爲めに二人が生きて居るやうなものだ。併し、靜かなる夜、灯の下に座つて天眞の我に返る時があるならば、數子は屹度ある疑ひと悶えとに到着したに違ひない。經濟の膨脹は果して自分に幸福の思ひをも增したであらうか。

或日の事であつた。數子はある慈善をなす爲にとて、幾何かの金子を正雄に請求した。すると意外、彼は消魂しい聲を出して、

「いや、どうして其樣な閑氣な金があるものか。」

「えッ、お金がないと仰有るの？　唯こればかりのものを……」

「家の支出が非常に增したので。」

「だつて又それ相當の收入が殖えて居るぢやありませんか。」と得意らしい數子の解釋。正雄は深く考へて只頭を振つて居るばかり。

「ではねえ貴郎、以前から大テーブルを買はうッて申して居るでせう。ですから其テーブルを一時中止にして、その代りにお金を妾にを下さいましな。」

言つて顏色を覗つて居る。正雄は至極冷やかに、

「さうしたければ……」

「あら、貴郎こそさうしたければだわ。」

「だつて大テーブルを買はうと云つたのは數さんの案だもの。」

「えい、それは申しました。だけれど、あの時若し利光の奥樣が必要だと仰有らなかつたら、妾だつた彼樣な大テーブルなんか買はうなんて云はなつくてよ。」

「利光婦人はまるでお前のオラクルだ。一體女の話相

手など云ふものは、僕等には悪魔のやうに見える。」
數子は答へをしなかつたが、其目には涙か宿つて居る。
「お前がさう云ふ風に、大テーブルも欲しい、慈善もしたいと云ふのなら仕方がない。僕はお金を出すから好いやうにするが好い。」
「あら、貴郎は妾が無理を云つて居るのだと御考へなさるの？」
　これは大分込入り過ぎた。併し結局、數子の提議は容れられてテーブルもそれに屬する花瓶も共に購はれたのである。固と數子の堅實な心を斯様に浮薄に傾けさせたのは、獨り利光夫人一人に止つた譯ではない。それには何百萬圓の資產家だと云ふ村井氏の夫人も居る。磯谷夫婦が一旦從來の主義を破つてから、幾多の富人と共に身を花やかな交際社會に投入れて、富を繕ふに餘程の苦心をしたのであつたが、兎に角今日迄對等の地位を保つて、甚しく襤褸を出さず、方々から晩餐會なり、園遊會なりに招待せられた度數も澤山であつた。されば當然此方からも折々御馳走に招待する義務がある。或日磯谷夫婦は右の譯合で、不圖この相談に及んだが、此時數子は急に思ひ出したやうに、
「それはさうと、伯父樣は隨分長く入らしやりませんのねえ。」
「多分僕達の交際仲間が以前とは違つて來たので、變に思つて居なさるのだらう。」
「變に思ふ位なものですか。氣に喰はないのですよ。今日伯父さんをお招きして見ませうか。」
「いや今日は駄目だ。利光教授や村井博士やが來るのだから、伯父さんが居ては厭がるだらう。」
「そして、伯父さんがお出ですと、子供達を皆なテーブルへ連れて來なければなりませんからねえ。まあ伯父さんは明日にしませう。二度に別けて。」
　正雄は外出、數子は女中と二人で早速準備に取掛つた。例の大テーブル、皿、葡萄酒、コップと順序よく並べて居ると、俄に表口に荒々しい呼鈴の音、聞くより數子は女中に命じて、

「お前見てお出で。けれど妾は留守だと云ふのだよ。」
女中が行着いたか行着かぬに、早や足音は聞えて來た。見れば伯父である。
「數子は留守に違ひないのか。」
「はい。奥樣は何かお持ちになつて、外出なさいました。」
「出てからどの位になる？」
「かつきり一時間で御座います。」
「さうか。では直に戻るだらう。私は此所で待つて居やうわい。」
「否え、午餐頃迄は御戻りになりませんので。」
「何か、今日は歴々の人にでも御馳走をしやうと云ふのかね。」
女中は調はぬ口振で、
「いゝえ、あのお三方ばかり。」
正直な伯父は首尾能く女中の言葉を信じて了つたものらしい。斯うなると流石にまだ若き數子、何とやら恐い困しい心か胸一杯に擴がつて來て、飛出して眞實を告たら、どんなに心が休まる事だらうと云ふやうな氣持がする。一層逃出す道はなからうかと、室の四方を見廻るけれど、固より其樣な逃げ口があるべき筈もない。其間に、伯父は帽子と杖とを下に置いて、窓の方に腰を下し、
「水を一杯貰はうか。」
と女中に頼んで居る。
數子はとつおいつした末、終にこゝに隱れおほする事に決心した。待つと云つたとて直に歸るであらう。其代り翌日は早朝迎ひに行つて、濟まぬ心を清々させやう。と思つて居ると、今度はまた頻りに新聞を呼ぶ聲がする。
「あゝ〳〵どうしたら好いのだらう。」
泣きたいやうな心持で、室の片隅に少さくなつて居ると、後に當つて閾の引手のがたつく響、萬事休す。
女中は慌てふためいて、
「貴君樣、その戸は具合が惡う御座います。」
其効はなかつた。ぱつと開いた伯父の眼前に哀れな

數子の後姿、その横顔の青白さと云ふのはない。
『あら伯父樣で御座いましたの。妾こゝへ隠れた時は他の方だと思つて居ましたのよ。』
『お默りなさい。』
と伯父は嚴格に女中の方を指して、
『數子、お前が噓を吐く爲に、あの罪のない女中にまで噓を云はせたではないか。お前は實の子のやうにして育てた私のことを忘れたのだらうなあ。忘れたのならそれで好い。私はもう用事がないから。』
『あれ……伯父樣、お歸りなすつちや妾厭ですよ。申譯が御座いますからさあ。』
一生懸命になつて數子は伯父に抱付いた。
『いや、この上噓なんぞ吐かれて堪るものか。』
『おや伯父さんは妾の云ふ事を聞いて下さらないの。少い時から斯樣に一人前の人間になる迄世話をして下すつたこの妾を……』
これを聞くと老人は急に聲を濡ませて、
『其の時分にはお前は私の慰籍ぢやつた。正直な優しい女の子で、お前より外に愛するものと云つては、全く何もなかつたのだ。その一つしかないお前の今の有樣は何だらう。』
落膽したと云ふ見得で、力なく其身を椅子にもたせかけ、溢るゝ眼の涙をハンケチで包んで居る。
『あの伯父さん、それは斯うなのですよ。誰方が來訪になつても妾は留守だからッて、女中に云ふやうに……』
『さう云ふ本人が何故留守でないのだ。』
『あら、今日では誰でも留守と云ふものを使ふのですよ。噓を吐くのではなくッてよ。』
數子の所謂辯疏なるものが、餘りに飛離れてらちがないので、固くなつて居た伯父も思はずくす〳〵と吹出さずに居られなかつた。
『留守と云ふのは部屋の隅に小さくなつて隠れて居る事を示すのかい。併し私が扉を開いた時の哀れな姿と云つたらなかつたよ。』
『もうこれから誓つて留守なんぞ使ひません。よ、伯父さん。』

「無論の事だ。」

「ですけれど、留守を使ふ事は全く虚僞ではないのよ。今日は忙しいから御面會が出來ませんと云ふ事の代りに、皆なこの留守を使ひますわ。」

「他人は知らない。何故お前はありのまゝ話さないかへ。女中は午餐迄歸らぬと云つたわ。」

「だつて、あれは女中がいゝ加減な事を云つたのよ。妾は只「今日は留守」と云ふ事丈を命令て置いたのですもの。」

「すると何かい。お前は女中が虚僞を私に告けたと云ふのだね。」

「はあ。」

「それでは數子、午餐迄歸らぬと云つた女中の方が、家に居て留守を使はせたお前より虚僞の度か强いの云ふのだね。」

この一言に數子は流石に手も足も出なかつた。その理詰に對して、平に謝罪すると、伯父は再び眞面目な態度に戻り、

「それは譯のない事だ。虚僞を云はれた私は喜んで許して上げる。だが、私は神樣でないから、お前が他人に虚僞を云つた事に就いて、私に少しも其罪を許す權利がない。それは神樣に御賴みするが善いさ。」

云ひ捨てゝ、伯父は此室を立去らうとするので、

「伯父さんお歸りなすつちやいけないことよ。でないと、矢張妾の心が晴れたやうに思はれませんもの。」

伯父は終に姪の願ひをきゝ入れて遣つた。同時に數子は重荷を下したやうな心地がした。改めて別の部屋に伯父を請じ、退屈凌ぎにとて有丈の新聞を集めて其傍に置き、自分は仕殘しの準備に取掛つたのである。間もなく正雄が歸宅した。彼も矢張其浮華の心から、訥朴な非ハイカラな伯父を厭つて居るけれど、流石は妻の最大恩人、口に出しては云はれない。如何にも嬉しさうにして挨拶した。

此日招かれた客人は善良な見識のある人々であつた。同じテーブルには豫定外の數子の伯父も列して居たが、彼等は此老人の實直な堅固な精神に早くも驚かされて了つた。老人は新空氣を吸つて居ると云ふ當世紳士に對しても、聊か臆する色なく、それかと云つて獨り好がりの頑冥な所もなく、話振、態度、孰れも整然たるものであつた。

御馳走の後、數子が食堂を出やうとするのを伯父は呼び止めて、子供達の部屋に案内して呉れと云ふ。そ

れで二人は連立て行つて見ると、丁度今部屋中は狼藉を極め、末の子供は空の皿を片手に差上げて、顔中パタだらけ、高い癇聲を出して泣喚いて居るのである。

「おゝ／＼坊やどうしたの。」

母親は手早く始末をして、伯父には申譯のやうに、

「どうも乳母やがまた暇を取つたものだすからねえ。」

「そうかも知らんが、これは何と云ふ樣だらう。數子、まあ其方へ腰をお掛け。お前はまだ記臆して居るだらうと思ふが、私は正雄とお前が結婚するのを、一度止めた事があつた。止めた譯は、正雄がまだお前を滿足させて行く力がなからうと思つたからであつたが、其後、お前の覺悟と考へとに氣を付けて居ると、大變眞面目で感心な所があるので、私はやれ／＼と思つて安心したものだ。そして、結婚を危んだのは私の誤りであつたと云ふ事も悟つた程だ。一時私はお前の愉快らしい顏色を見てどんなに喜んだものだらう。只に愉快な顏色丈ではない。日々なければならぬ物は悉皆欠かさずお前は持つて居た。一口に云へば、慾望とそれに應じた金使ひとが、ちやんと適度になつて居たからだ。然るに、近頃になると、お前の家の經濟が大變に膨脹して來て、大分風向が違つて來た。まあ、これが以前の午餐であつて見ると、御馳走が單純で、料理に念が入つて居た。そして、嫣然とした可愛い子供が、彼方へ行つたり此方へ來たりして、絶えずテーブルを賑はして居たゞらう。引換えて今日等の御馳走は、大變に金が掛つて居て、品數も澤山ありながら、料理が實に拙い。精神が籠つて居らぬ。尤も、皿と云ひ、ナイフと云ひ、それにフォークだつて、以前のとは丸で比べ物にならん。錢出して買へば非常なものであらうが、肝腎の子供達は別の部屋に閉籠められて食堂を覗く事も出來ず、母親は母親で、始終それの方に氣を取られて居るから、話合ふ聲も冴えねば、本人も面白くない、と云つたやうな景色だ。」

「まあ、伯父さん、書のやうですこと。」

「數子、斯う云へば、お前は又これが當世風ですと云ふだらう。それは當世風でも眞正に心に樂みを覺えてして居る事なら結構だが………」

「いゝえ、些少も樂みぢやないのですよ。女中は皆な善くない者ばかりですし、乳母やは歸つて了ふ――」

「そ、その乳母やが惡い。自分が產んだ子供ぢやないか。自分で產んだ子供なら自分の手で世話するのが當然だ。子供を女中や乳母やに任せ切りにして、平氣で

居る母親を見ると、私は腹が立つてならない。」

伯父の諫言苦言は尚ほしばらく續いた。その一言一句、悉く愛情に滿ちた肺腑から出るので、數子はしんみりと嬉しく聽いた。彼は說敎を了へると、直く此家を去つたが、入違ひに正雄が這入つて來る。

『數さんか。どうしたのだ。伯父さんから說敎を聽かされたのだらう。近頃伯父さんは彼樣な御馳走を食べた事がないのだもの。兎角老體は今のハイカラ生活を知らないから困るよ。一體何う云ふことを云つたの？』

數子は噓啼きし乍ら、

『お客の仕樣と料理とが拙いと仰見るのです。』

『其樣な事があるものか。非常に丁寧にしてあるさ。』

『はア、ですけれど、妾は何だか惡な心地よ。』

斯くて其年もそろ〳〵末に近附いて來た。ある夜正雄と數子とは一室に寄合つて、これ迄の會計簿を調べ、大晦日に拂出す金高の勘定をして見ると、曾て立ててあつた豫算とは大變な相違を生じ、別に幾百圓かの工面をしなければ、新春を無事に迎へる事が出來ないと云ふ始末である。正雄は流石にこの結果を見て吃驚したが、暫時考へて、

『いやこれは收入の方が減じたからだらう。』

『さうかも知れません。これから月々の拂ひを縮めませう。』

斯う數子は答へて、更にいろ〳〵節減すべき費目の種類を擧げて見たが、結局、今迄通りに据え置く外、別になすべき方法がないと云ふ事に定つて了つた。現在の豫算額は實際必要の金高と見える。

最後に數子は云つた。

『こゝ二三年の生活は、全く手一杯と云ふ處で御座いましたねえ。』

さま〴〵に、過去の事を思ふて、正雄の頭腦にはさま〴〵の考へが浮んで來た。

『あゝ私は最初家を持つた時に抱いた覺悟から漸々と離れて居るのだ！』

と獨語する程に氣は付いて居たが、それかと云つて、現在の華美な贅澤な生活と全然離れて了ふ事はどうしても堪へられぬ。矢張村井家や利光家の生活法の後が追ひたくてならぬ。

彼等夫婦の目には以上二家の生活法は全く美しい虹のやうなものだ。何時まで續くであらう。

前號にて紹介せし「三つの生活法」の第二なり。「新世帶」と關聯して讀玉はんことを。（濟山生）

●金錢の觀念

私は金錢に對する考へが、日本と外國と多少違つた所が有るやうに思ふ。

本年京釜鐵道開通式に、朝野の紳士を招待して、滊車滊船の一等パスを贈與された、其パスに、乘客多ければ劣等へ下げると記してあつた。固より當然のことであるが、若しも無賃なるが故に下げるといふ意味ならば、頗るおかしいのである。既に一等といへば賃錢を拂ふと拂はざるとに關係はないので、たとへ金を拂ふた者といへども、後より來りし人が我慢せねばならぬかと思ふ。余が友人が米國に苦學中、難症の眼疾に罹つた時、當時米國にて有名なる眼科醫に（親類と雖ども現金でなければ診察せぬといふ程の人）。施療を乞ひしが、一言にして謝絕せられた。然れども盲目となつては一大事故、再び熱心に請ひたれば、足下は本當に金が無いのか、それはさぞ困るであらう、外國に居て病に罹り、金が無いとは心細きことである。それでは私が無料で治療してあげませうと請合つた。けれども其人は、日本の考へで、施療であるから多少取扱を粗末にせぬかと思つたのである。然るに行つて見れば、何十弗の診察を拂つた者と其の取扱に於て少しの差別もなければ、階級もない。行つた順に甚だ叮嚀の待遇で有つた。即ち、取る取らぬは金錢上の問題にして、治療は神聖であり、責任であつて、金の有無も、身分の高卑も、治療の上に何等の關係を有つて居らなかつたのである。日本であつたならば、あれはタダであるから、後廻しにするとか、何かしら差別があるのである。是等は金錢に對して、注意すべき問題であらう。

且つまた慈善事業或は寄附金と云ふ如きことに付きても、よく注意せればならぬのである。慈善事業或は寄附金の如きは、證文約定等の公の手續をしてあるものとは違ふので、彼に催促する權利も、應じなければ法律の力に依て取ると云ふ權力も弱いのである。故に、苟も承諾したならば、少しも催促を受けないやうに、又手數のかゝらないやうに、此方から進んで支拂ふと云ふ德を養はなければならぬ。是に付てボツクスとセルダンと云ふ人の話がある。

「或時ボツクスの處へ壹商人が來て、貴下の裏書した切手が、まだ期日には早いが支拂つて貰ひたいと云つた時に、都合あしゝと斷りました。然るに、偶ま幾許の金の勘定をして居りましたから、其金を以て支拂は出來ぬものやと問ひますと、是れはセルダンへ返濟する金である。其金は私が死んでもセンダンは取る權利がある。しかも、其金は無抵當無期限である故、余が死ぬると彼が取る權利が無くなる。それで、此の如き信用借の金は、縱令期日がなくとも、苟も返せる折あらば速かに返さなければならぬと言つた。商人歎息して曰ふには、此の如く正直なる人に證文貸しを爲したのは、余の不德なりとて、直ちに其の手形を燒棄てた。ボツクスは是れを見て更に考へ、立所に其手形面の金を商人に拂ひたとある。即ち曰く、セルダン待たざるべからず、セルダンのはこの商人より後に借りたるものなればなりと、」然るに我國普通の有樣では、金利の出る、證文のある裁判所へ訴へられるやうなものなら非常に重んじて、信用借の返濟を後にする風である。是等の事も參考とすべき事がらである。（江原素六氏談話）



新刊紹介

▲**青春の危機**　是は米國の神學者ストール氏の著「ホワット・エ・ヤングメン・オート・ツー・ノー」を譯したもので、性慾、生殖器、男女關係、結婚等に關する事件を、生理上より、道德上より、親切に説述して、大いに靑年を、戒めてある。此種の智識と教訓とは、或者は之を公言するを憚り、或者は人情の弱點に投合せんが爲に之を僞善的に用ゐて居るが、此書の如きは其の公明正大にして眞摯なる所、頗る推奬の値があると思ふ。但し餘り趣味のある書方では無い。(價卅五錢、京橋銀座教文館)

▲**模範自治村**　是は有名なる伊豆の稻取村と宮崎縣の生出村と千葉縣の源村との事を書いたもので、眞に自治村の模範を示して居る。殊に稻取村の如きは、之を通して幾許か將來の理想社會を望み得る心地がする。(價卅五錢、本鄕東片町新公論社)

▲**紀念書集**　白馬會創立十年の紀念として先頃紀念展覽會が催されたが、其時集まつた新舊の作品を寫眞版にして一册と成したものが即ち此集である。白馬會の畫風を見、日本畫界の風潮を知らんと欲する者は、一册を其文庫に備へて然るべしと思ふ。(價九十錢、京橋五郎兵衛町文淵堂)

▲**新紀元**(第一號)　基督教と社會主義との雜誌にして、木下尚江、石川三四郎、二氏の手に成るもの。德富蘆花の小説「黒潮」第二篇が第二號から載せられるといふので大評判。(每月一回、一册價十錢、東京角筈其社)

▲**光**(第一號)　日本勞働者の機關、普通選擧の急先鋒、印絆天雜誌、凡人主義の新聞などゝ銘を打つた所に、其の特色と抱負と主張とを示して居る。幸德秋水、西川光次郎、山口孤劍、宮崎湖處子、堺利彦、久津見蕨村、白柳秀湖の諸氏執筆す。(每月二回、一部價三錢五厘、本鄕動坂町凡人社)

▲**ヘナブリ**(第一號)　時事漫畫に一種の特色と才氣とを示して居る。文章の方は投書歡迎といふ處で人を取つてゐる。(每月一回、一部價十錢、東京淀橋小學校前東光園)

▲**我輩は猫である**(夏目漱石著)　三馬の浮世風呂を明治式に行つたもの、面白いと此上なし。夏目君は文科大學講師としてよりも「猫」の著者として有名になつた。僕の家では三晩續けて此の「猫」の朗讀會を開いた。ハイカラ式の美本だから値は高い。(價九十五錢、京橋銀座服部書店)

▲**北米の新日本**(安部磯雄著者)　著者が本春、早稻田の野球選手を率ゐて北米に遠征を試み、其觀察の結果、大に渡米の利益を感じて我が同胞、殊に靑年女子の移住を奬勵したもの。廣き米國の天地に其の自由なる腕を揮はんとするもの丶必ず一讀せねばならぬ本であらう(價三十五錢、博文館發行)

▲**明治の婦人**(第一號)　今の婦人に要求する所は、實用的才能と美的修養であるとて成女學校から健氣な産聲を擧げたもの。體裁など仲々整つて居る(每月一回、一部價八錢、麹町區下二番町其社)

▲**家族合せ**　新案の骨牌である。主人、妻、娘、息、犬の五枚を一家族として總て十家族ある。人の手に持つてるのを覗つて早く多く家族を貰ひ集めてしまふのが勝になるのだが、やつて見ると仲々面白い。「甲野さん、會社員灰殼木月郎の犬を下さい」「お生憎さま」「乙田さん、ドクトル飯井竹庵の娘を下さい」「おや〱とう〱嗅き付けられたか。ハイ」「十失敬ッ」「ナッ、有難うつて言はなかつたもんだ皆な取られて幽靈になつてしまつた。」こんな工合で乞食になつたり隱居が出來たりする。正月の慰みとして甚だ無邪氣なる好き屋内の遊びである。これで繪が入つて居たら尚更善かつたらうと思ふ〔説明書付一組價十二錢、本鄕駒込西片町內外出

販協會發行）

▲ホトヽギス（第九卷第二號）　四方太氏が「實家」を見に行つた記の一節「地固めは確かですかと聞く。ソリヤもう大丈夫なものですよ……それでもれ、お父ッさんが心配だからつて、あの通り崖つぷちに樹を植ゑたりなんかしてれ、ソリヤもう大丈夫ですよと念を押して云ふ、所謂岡ふに落ちずして語るに落ちるで、」などチヨット面白い。俳味滿册、その道のものには無二の伴侶であらう（毎月一回、一部價十五錢、麹町區富士見町其發行所）

▲光風（第四號）　是は白馬會の機關として隔月一回發行する雜誌で、畫あり、畫論あり、美文あり、斯界の消息に通ぜんとする者の需要に適す（價一册卅五錢、本鄕眞砂町其發行所）

▲月刊スケッチ（第二卷第八號）　近來繪畫趣味の廣く世に行はるゝに連れて生れたる者、畫の小品と詩文の小品とを併せ收めて其間に趣味と品性とを保つてゐる。（毎月一回、一册價十五錢、本鄕眞砂町スケッチ會）

▲帝國畫報（第一號）　平和回復の結果として軍國畫報が改名しだるもの、畫報も亦近來流行物の一つである。（價一册三十錢、神田富山房）

▲新公論（二〇の一一）　本鄕東片町其社

▲天鼓（一四）　神田今川小路北上屋書店

▲新佛教（六の一一）　駒込新佛教徒同志會

▲統一主義（一の三）　橫濱山下町統一協會

▲東京市報（三〇）　神田錦町其社

▲弘道（一六四）　麹町區飯田町其會

▲教育公報（三〇一）　神田帝國教育會

▲福田會月報（三五）　麻布福田會育兒院

▲埼玉衞生新誌（一六）　浦和町其社

▲商家の友（四四）　京橋時事新報社

▲經濟新聞（五四）　日本橋其社

▲工業の花（八の三一）　大阪職工教育會

▲好學雜誌（二九）　麹町好學會

▲博物學雜誌（九の六三）　神田動物標本社

▲先世（一の一）　神田其社

▲中學講義錄（二の三）　神田國民中學會

▲文の友（八）　日本橋大倉書店

▲青春（六）　下谷區谷中初音町其社

▲新福音（二）　函館鍛冶町其社

▲火鞭（三）　本鄕根津平民書房

▲少年（二六）　京橋時事新報社

▲家庭（五の一一）　本鄕四丁目文明堂

▲婦人と子供（五の一一）女子高師フレーベル會

▲日本の家庭（二の三）　神田同文館

▲常磐（八の一一）　橫濱山手其社

RŌMAJI RAN

（ローマ字欄の新設）

NIJUNEN bakari mae, Rōmajikai to iu ga okotte, ichiji daibun sakan de atta ga, sonogo He no kieta yōni natte simatte ita. Sikarni konogoro mata aratani Rōmajikai ga okotte "*Rōmaji*" to daisur Zas-i mo dete ir. Zentai kono Rōmaji o motte shōrai no Nippo-Monji to sadamer to iu kangae, wa, Shikisha no aida ni attewa, hotondo mō Ron no nai koto de, tatoe shōsū no Hoshushugi-ha ga ichiji tashō no Hantai o nasutomo, osokare hayakare kore ni natte shimau ni kimatte iru, sareba Wareware wa ima kara skosizuts kono Rōmaji ni narete oite, narbeku hayak kono Sinkiun no kitar koto o tasukenebanaranu. Sokode kono Kateizassi ni oitemo kongo Rōmaji Ran o mōkete, 1 Pēji ka 2 Pēje ka o sore ni atetai to omou.

Sikasi kokoni hitots chūi subeki wa kono Rōmaji no Tsuzurikata no koto de ar. Mukasi no Rōmajikai wa Tsuzurikata no ittei site ita ga, kond no wa Kaiin meimei no jiyū ni makasete iroiro Kenkyū o tsumi, sono aida ni oite sizen no Tōta o mats koto ni site ar. Mottomo daitai ni oite wa, narbek kantan ni, sosite Igi no meihak ni wakaruyōni, kaku to iu koto ni wa kimatte irrasii. Yueni, kongo Wareware no kaku Bunshō mo, kakite ni yotte, mata toki ni yotte, skosi zuts Tsuzuri ga chigau de arō. Tama niwa kokoromi no tameni zuibun toppi na Sin-an o yatte miru kamo sirenai. Shokun mo mata kore ni taisite Iken o odasi kudasai.

本誌の發展

本誌が生まれる時に擧げた六つの綱領は不束ながら滿三歳の今日まで忘るゝことなく、少しづゝ、そして絶えず其實を擧げてまゐりましたのは、是れ偏へに愛讀者諸君のお陰であります。此の御好意に報ゆる覺悟を以て愈よ來年一月から一發展を試むることゝなりました。前々も申します通り、本誌は世間の多くの雜誌の樣に美々しく飾りなどして、派出な商賣をすることは迚も力に及びませぬゆゑ、唯滿腹の誠を以てジミにマジメに、舊裝のまゝで、從來の精神を貫徹する考であります。

- 健全の思想
- 改革の氣象
- 清新の趣味
- 親切の教訓
- 平易の文章
- 通信の說明

▲**紙數** は前號に記した通り今までの約二倍になります。

▲**編輯** は堺利彥、深尾韶、西村渚山の三人が共任に當ります。

▲**記事** は豫め之を言ふ事は出來ませぬが時としては全紙の三分一を占むるが如き長論文もありませう。時としては全紙の半を塡むるが如き小說なんどもありませう。或は又一冊の全部を擧げて重要なる一問題に關する記事評論を載せる事もあるかもしれませぬ。されぱとて小品、短篇、隨筆、斷片の奇拔も亦た決して忘れぬ積りであります。

▲**本誌** は讀者諸君と記者との共有家庭であります。故に全紙を開放して廣く寄稿を歡迎し、有益にして面白く、活氣ある事柄を載せたいと思ひます。

▲**代價** は擴張につれて高くなりました。それについては次の件々御承知を乞ふ。△郵稅とも一部金十錢、半年分金五十五錢、一年分金壹圓。△今年分より來年分に引續いて前金御拂込になつて居る諸君に對しては、本社にて新舊代價の計算を爲し、前金切となりたる時、それぐ御通知申上げる事と致します。△本年にて前金切となる方は。どうぞ新たなる代價計算を以て次の前金御拂込を乞ふ。

由分社

東京市麴町區元園町一丁目廿七番地

社會主義神髓

▲久しく品切の處、著者幸徳秋水の洋行につき、其置土産の意味を以て、此度第七版を發行せり
▲減價一册二十錢(郵税共)

▲發行所　東京市麹町區元園町一丁目　由分社

小説 良人の自白

▲明治卅八年の文壇に於ける掉尾の大作基督教と社會主義とより來れる著者木下尚江氏の理想を此書に見よ▲上中下三册價金壹圓各册卅五錢(郵税共)

▲發行所　東京市麹町區元園町一丁目　由分社

堺利彦 小品文集 半生の墓

▲哀史梗概▲不知所往列傳▲細君の說法▲獄中生活▲永久の滿月▲別莊拜見の記▲一人の要する土地幾許▲予の半生(自傳)▲外數篇▲價一册卅五錢(郵税共)

▲發行所　東京市麹町區元園町一丁目　由分社

新紀元 第貳號 十二月十日發行 一部價十二錢

▲基督教と社會主義の雜誌▲木下尚江、石川三四郎、安部磯雄執筆▲別に徳富蘆花の「黑潮」第二編續載▲半年分七十錢、一年分一圓卅五錢

▲發行所　東京新宿角筈七六二　新紀元社

文藝評論 每月一回 火鞭 第四號 十二月十日發行 一部價十錢

▲第四號は主として當今の兩性問題の解釋に貢獻す▲戀愛に對する江湖先進の士數十名の解答を滿載す▲半年分五十八錢、一年分一圓十錢

▲發行所　東京根津宮永町卅六　平民書房

社會主義倶樂部

△社會主義に關する内外の新聞、雜誌、書籍を備付けて縱覽に供す△東京及び地方同志諸君の來遊を乞ふ(主任者、森近運平)

神田三崎町三丁目一番地
東京堂の並びミルクホール

平民會

本誌代價

本號に限り	一册金六錢(郵税共)
以來年一月後	一部金十錢 六ヶ月〃金五十五錢 一ヶ年前金壹圓 (何れも郵税共)
廣告料	特別一頁十圓 普通一頁七圓

●規定

▲本誌は每月一回(一日)發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意を乞ふ。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治三十八年十一月廿九日印刷
明治三十八年十二月一日發行

東京府豐多摩郡千駄谷村原宿一九一
發行兼編輯人　西村惠治郎
東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中村鋼助

發行所　東京市麹町區元園町一丁目廿七番地

大賣捌所　上田屋　東京堂　良明堂



家庭雜誌第十一號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治三十八年十二月二日發行

慈善券

ライオン歯磨小袋入に添付せり詳細は
實物に就き御承知あらんことを乞ふ

北米セントルイス萬國博覽會

名譽銀牌受領



發賣元 東京 小林富次郎

發兌元 大阪 小林支店

粉製 赤鑵入 發賣

意匠嶄新且つ優美なる彩色鑵入にして頗る携帶に便なり能く香氣の發散を防止し終に至る迄本品獨有の佳香を保つを得べし遠征の士其他旅行用に適せり

定價一個拾貳錢

復刻版 家庭雑誌 全6巻

附／解題・解説・総目次・索引

一九八三年二月二〇日発行

定　価　四八、〇〇〇円

発行者　船　橋　治

発行所　不二出版株式会社

〒113　東京都文京区本郷三―一六―六

TEL 〇三(八一二)四四三三／振替東京6―94084

LOAN PERIOD 1 **1 MONTH**	2	3
4	5	6

ALL BOOKS MAY BE RECALLED AFTER 7 DAYS

DUE AS STAMPED BELOW

AUG 20 '89		
JUL 12 1989		
Santa Cruz Jitney		
REC'D		
JUL 14 1989		
FAL		